

---

## カアディスからの手紙（112）

2006年6月30日

---

ドイツ・アルゼンチン戦すごかったですねー。もうドコがかってもおかしくない。スペインは結局フランスに負けてしまいました。予想外の好調で予選リーグの幕を開けたスペイン。逆にエエッと思うほどショボイ開幕だったフランス。けれども、その後スペインが波に乗り切れず段々しぼんできたような感じだったのとは逆に、一戦ごとに底力を発揮しだしたようなフランス。

トーナメント一回戦でスペインと対決した日は、ジダンもアンリもマケレレもそれまでの顔つきとは違うように見えました。まあ、結局スペインは大会前に言われていた勝負強さのなさがモロに現れてしまったということでしょう。大体がことに執着しないあっさりした気質がこういう結果につながっているような気がします。

ところで、これまでの全試合を通じて、審判の判定技術がゲームを面白いものにも、ウンザリしたものにも変えてしまうことに改めて驚きをおぼえます。それは、リーグ（スペイン・リーグ）を見ていても常に感じることはありますが、特に全世界が注目する大会での判定ミスは取り返しのつかない結果を呼び、甚だしく興をそぐことにもなりかねません。前大会ではスペイン・韓国の試合にもそれがあってそのことはこの国ではいまだにサッカー好きのカタリグサになっています。

審判が人間である限り見間違いや、見過ごしがあるのは避けられないことですが、主審と線審の協力体制はもう少し何とかならないのか、と思います。極論するとホイッスルを吹く回数が少ない審判の試合ほど白熱したいいゲームが見られるような気がします。PK戦までもつれ込んだウクライナ対スイスなどがそのいい例でしょう。

8強が出揃いましたが、残るべきところが順当に残っているなという感じですね。ウクライナに代わってスペインが残ってもいいような気がしないでもないですが、まあ、こんなものでしょう。UEFAカップやチャンピオンズ・リーグでのスペイン・チームの活躍もその多くは外国人選手の活躍によるものですからね。

---

## 「ミドナイト・ウォーク」の巻

---

モウかれこれ20年ぐらい前だと思いますが、ロバート・デ・ニーロの「ミドナイト

・ラン」というおもしろい映画がありましたがお覧になりましたか？  
この4年間のスペインでの生活で、特に不自由したものはありませんでしたが、映画大好き人間の私達にとって、チャンと話の分かる映画が見れないことが唯一の不満でした。英語をスペイン語に吹替えた映画はとても私達には理解できません。

友人がDVDに録画してくれたものを時々送って来ていましたが、最近の日本では新しい作品はデジタルでの放映ばかりらしい。DVDで普通に録画・再生できるアナログでの放映は古いものばかりのようで、新作を見たい、という願望は所詮無理だったようです。

日本に帰っての何よりの楽しみは映画です。食べるものや酒はその土地土地でその風土に合ったものが一番だと思っていますが、日本語字幕の映画だけはナニモノにも替えがたい。 去年の春、帰ったときも2ヶ月間映画漬けでした。

\*



私達は普段でもあまり早起きの方ではないですが、ムンディアル・06が始まってからというものの文字通りの「宵っ張りの朝寝坊」になってしまい、面白いゲームを見た後では寝つきも悪くなるし、そうなる朝寝坊の度合いも益々ひどくなるので、ムンディアルが始まってからはその日の最終ゲームの後、浜の散歩に出かけます。ミドナイト・ウォークどころか日付は完全に次の日になっている時間です。裸足で波打ち際を約4キロ歩いて、シャワーをかぶったら、冷えたシェリーを一杯引っ掛けて

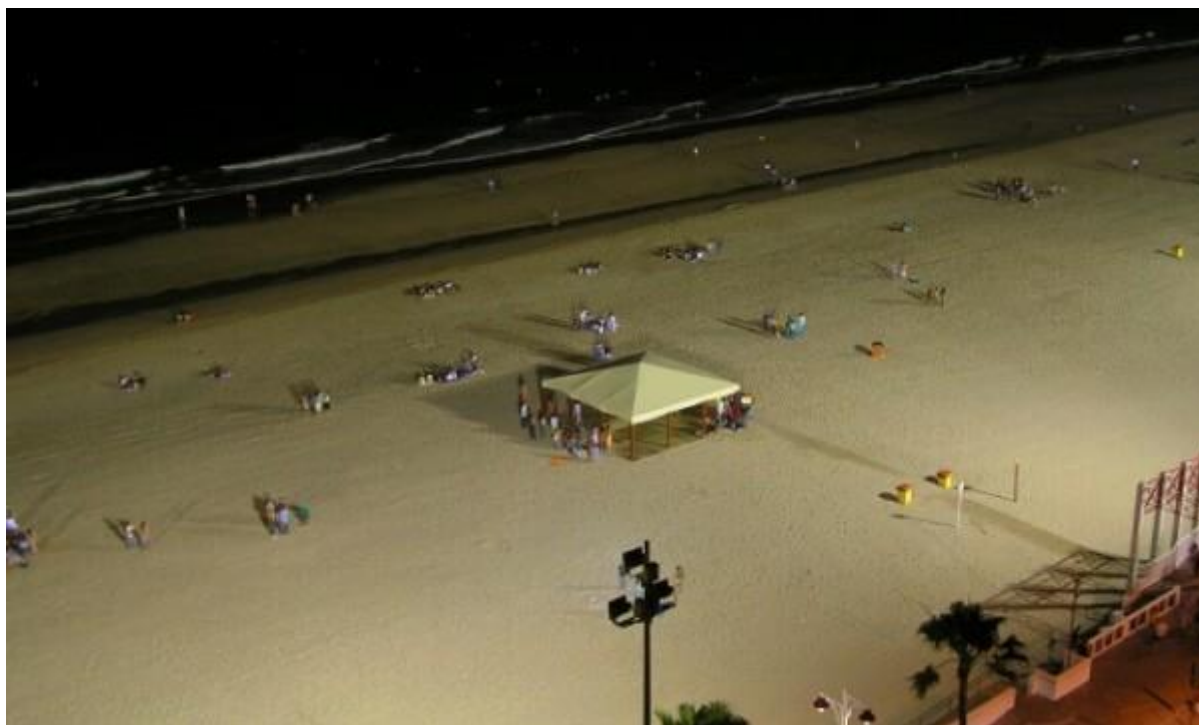
寝るとどうにか眠れます。寝付くのは2時3時が当たり前になってしまいました。起きるのが何時かはご想像に任せます。朝の浜の爽快な散歩は暫くしていません。

どうも近年快眠とは程遠い浅い眠りに悩まされているんです。40年の海上生活では一日に短い睡眠を二度ということの連続でしたから、スペインのシェスタの習慣にはピッタリはまったのですが、年々眠りが浅くなるのは致し方ありません。

さて、6月1日から浜は夏バージョン。日没には浜の照明が点灯されて、平日でも午前1時、週末は2時3時まで浜はこの通り明るく照らされています。消灯はその日によってマチマチなのもいかにもスペインらしい。サスガに平日の夜はミドナイトを過ぎると人影は少なくなり、時々、私達同様寝る前の睡眠薬代わりの散歩らしい人に出会うだけです。元々カアディスは安全この上ない町ですから、危険の匂いも全くありません。夜の浜の散歩に大金を持って出る人は居るわけもないから、ワザワザ人気のない浜まで引ったくりに来る間抜けなカップライもいないでしょう。

写真の右端は大聖堂。左端で光っているのは海に突き出た古城カスティーヨ・サン・セバ스티アンの灯台です。カアディス港に入港する船のよき目印です。浜は遊歩道から波打ち際まで全面明るくなっていますから懐中電灯などなくても大丈夫。もっとも歩いているうちに消灯時間になって突然真っ暗になってしまう事は度々ですが、でも大丈夫暫くジッとして目が慣れてくると、遊歩道からの明りも届いていて歩いて帰ってくるのに問題はありません。

\*



これは週末のミドナイト少し前の浜。あちこちにかたまっている人は大抵何か呑んでいます。海に入っている人も居るし、この写真では見えませんが泳いでいる人も。車椅子用の休憩所も夜はCDラジカセを持ち込んで格好のダンス・フローアー。

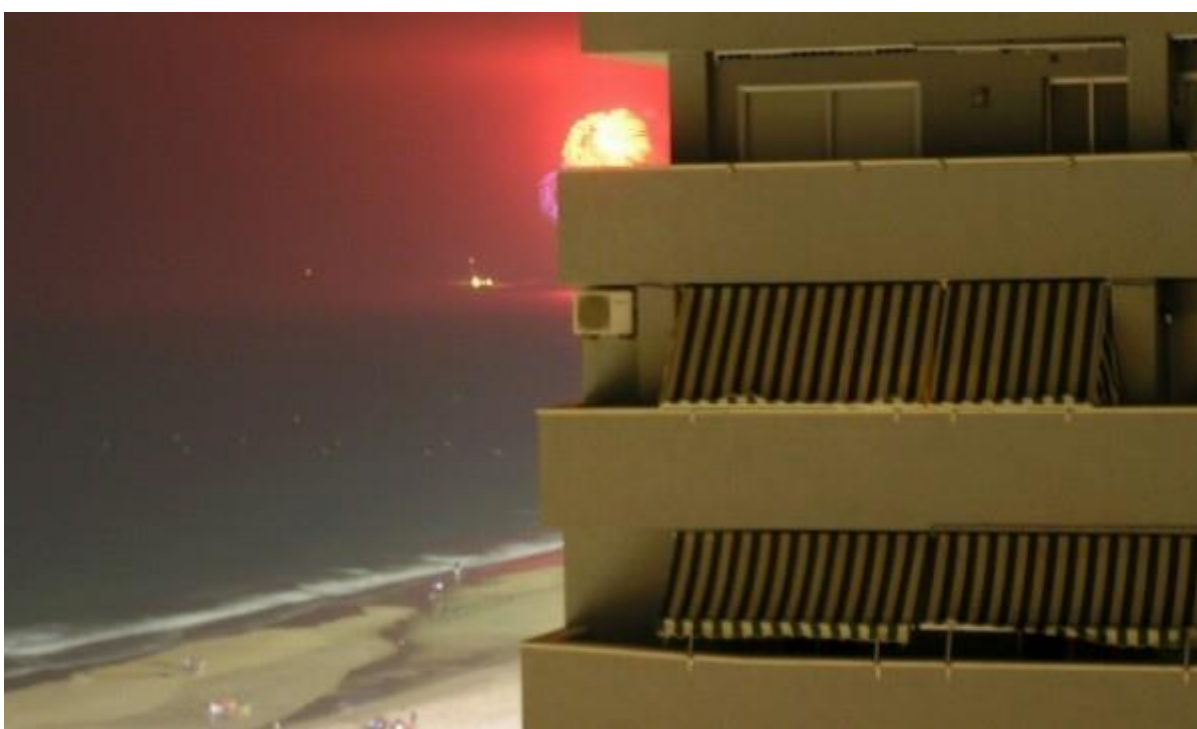


そんな夜にはビーチ・サッカーも。これなら涼しくて朝練よりいいかも知れない。リュックを二つ置いてゴール・ポスト。手の込んだ組は竹竿2本を立てて先端に細いロープを張って枠を作っています。

そんな組はタッチ・ラインもしっかり足を使って引いていますが、リュック組はラインなどナシ。ボールが水に入るか乾いた柔らかい砂地に入ったらフエラ fuera = サイドアウト。両サイドがやたらに広がります。

でも、こうやって爽快な夜気の中でゲームを楽しんでも、突然消灯になってしまうことも……。そうなるともう否応ナシにサドン・デス。

\*



先週、金曜日の夜、スイス・韓国のゲームを見終わった後ソロソロ散歩に出ようかというときに、外がなんとなく騒がしいのでベランダに出てみるとこの通り。正確にはミドナイト直後でしたから日付は24日土曜日になっていました。

どうやらカスティーヨ(城)への海上通路で打ち上げているらしい。どうせなら城内で上げてくれたらウチからでもバッチリ見えるのに、隣のピソ(マンション)に半分隠れてしまっています。慌ててカメラを持ち出したのでピンボケですね。私達は事前には知らなかったので上げ始めてから気が付いたのですが、知っていれば三脚を持って浜に出ていたのに……。

さあ、この花火はナンなのか？ 改めてカレンダーを見ると24日はAlicante アリカンテという町のサン・ファンSan Juanの火祭り Las Fallas de San Juan の最終日でした。スペインのお祭りは殆どが宗教的なもので、特にサンSanなにがしと聖人の名前がつけば当然宗教行事です。この花火も多分何か宗教的なイワレのあるものなのでしょう。

そうなれば当然アリカンテだけでなく全国で大なり小なりこのお祭りはするのだと思います。ただアリカンテでは特別盛大にやるのでサン・ファンSan Juanの火祭りというアリカンテという風になってしまったのでしょう。

サン・ファンという地名もあちこちにありますがね。スペインは勿論、南米・北米にも多いです。その内、サン・ファンという名前の港にはいくつか行きました。

まず、プエルト・リコPuerto Ricoのサン・ファン。これは港の入り口に美しい古城のある、いい港でした。港口は狭く中に広い錨地をもつ港。スペイン船団がカリブ海を我が物にしていた当時の典型的な形の天然の良港です。その狭い港口を見下ろす高台の上に城を築き大砲を並べてありました。当時は外敵に対して鉄壁の護りだったでしょう。

いまはその城もカリブ海を一望できるいい展望台で観光名所になっていました。旧市街はスペイン風の味のあるところでしたし、住民も年寄りにはスペイン語しか話しませんでした。一方、新市街は合衆国統治になってから出来たアメリカそのものの町で味も素っ気もなく全くつまりませんでした。

次に、ペルーPeruのサン・ファン。ここは上のサン・ファンとは逆に至って殺風景な所。しかも、湾とは言っても開けっぴろげの小さな入江ですから太平洋のウネリがモロに入ってきて極めて危険な港でもありました。港の周りは人も住まない岩山だらけ。

\*

そんなところへ何しに行ったか？ ここはその近くの同じような条件のサン・ニコラスSan Nicolasとともに鉄鉱石の一大輸出港なんですね。港とは言え鉄鉱石の船積み施設があるだけ、従業員だって多分専用宿舎で寝起きしているに違いない。とにかく人家がないんですからね。

ウネリに大きくもまれる大型船を棧橋に着岸・離岸する作業は極めて危険でもあり、

この両港に行くのはウンザリしたものです。こういうところへ鉄鉱石を積みに行く船は小さくても載貨重量トンで5～6万トン以上、大は10数万トンですから、うねりの中での離・着岸作業は本当に大変でした。その後、防波堤を延長して多少改善されたとも聞きましたが、そうなってからは行かずに終わりました。

もう一つのサン・ファンはニカラグアのサン・ファン。ここは正しくはサン・ファン・デル・スール **San Juan del Sur**=南のサン・ファンです。ニカラグアという国はカリブ海と太平洋の両方に面していますが、その太平洋岸の南の端 Costa Rica との国境に近い港です。普通の世界地図にはまず出ていないでしょう。

ここも港とは名ばかりのオープン・ロード。open road とは船乗り用語で陸地に囲まれていない錨地、即ちあまり歓迎できない危険な錨地です。ここには港湾施設らしきものはハシケ用の小さい栈橋だけ。

湾内ではありませんから当然太平洋のウネリがきます。錨泊していても船は常に揺れています。そういう中でハシケを横付けして積荷を降ろすんですが、これがまた危険極まりない。折角航海中色々と気を配って大事に運んできた積荷を壊すことにもなりかねない、船長・航海士にとってはアタマの痛い港でした。上陸して息抜きを出来るでもないしね。 考えてみると実にいろんなところへ行ったもんだと思います。



照明が消えた後の真っ暗な浜。消えた瞬間はこの写真のように砂浜も見えず真っ暗ですが、実はちゃんと見えているんです。今までが明るすぎたから目が慣れていないだけ。そのうち、暗順応で歩くのに不自由ないくらいには見えてきます。

この時間、1時はとっくに回ったはずですが、よく見ると遊歩道には人がズロズロ。レストランやバルもまだまだ営業しています。アカンボをバギーに乗せて歩いている人や2～3歳児の手を引いている人さえ珍しくありません。これだものみんな宵っ張りになるわけだ。

さて、私達もソロソロ上がってシャワー・アンド・シェリーとするか。

\*\*\*

---